

## 愛の再検討

堀越 暢 治

日本の教会は、何故小さく弱いのだろうか、そんなことをいつも考えさせられています。

それで日本の教会の成長を妨げている要素について分析してみました。大別して教会内の問題と、教会外の問題が考えられます。教会内の問題としては、霊的無力、福音理解の不明確、マネジメントの欠如、が考えられます。教会外の問題も三点を考えると、PR不足、日本人の心の問題、封建社会、が考えら

れます。それぞれの項目についての細目は次の図に示します。

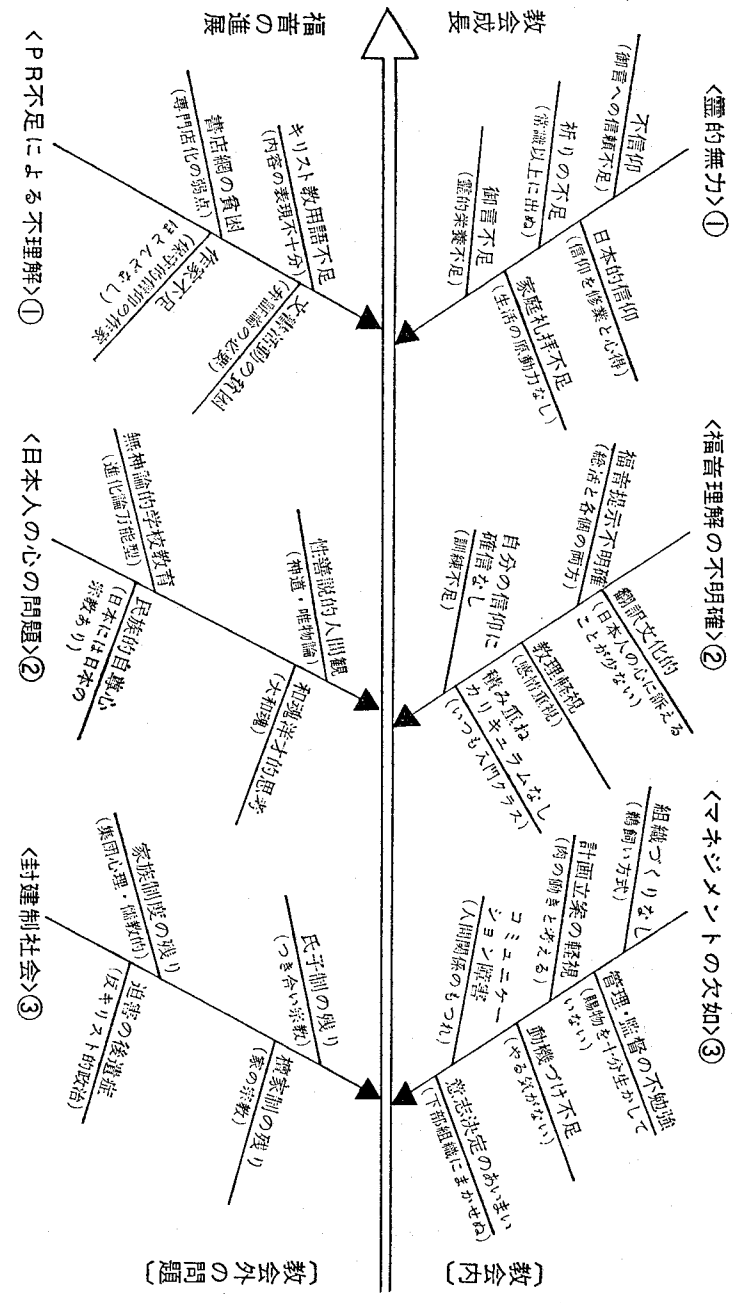
さてここまで来て、日本の教会が発展しない真の原因は何なのか、教会内の問題なのか、教会外の問題なのかと考える。聖書を読んではっきりしていることは、キリスト教がはじめから何の抵抗もなしに進んだところは少ない。使徒行伝は闘いの歴史だと云ってもよい程です。そうだとすれば、日本における教会の弱小の理由は教会外の問題ではなく教会内の問題を打破できない教会の無力さ、つまり、教会内の問題にこそ真の原因があると思うようになったのです。

一九六九年に一月程台湾伝道に行きましたがその時台湾長老教会の教会倍増計画の原理を聞くことができました。すなわち、十年間で一人が一人を導き、二つに教会を分ければ十年で教会は倍になる！……ところが日本に帰って静かに考えると日本の教会では十年経つと本人が去ってしまうケースが多い。倍どころかゼロ……しかもそれが、人間関係の連れからが圧倒的に多いのです。勿論その根底には、本人の信仰の問題がありますが、具体的には人間関係の連れ、③マネジメントの欠如の項で現れてきます。教理の問題で教会を離れるより、人間関係の連れで教会を離れてしまう方が遙かに多い。愛を説く教会が何故この位のことと連れてしまうのか？…何度も何度も考えさせられてきました。

そしてそれば「愛」を説くからではないか、と考えざるを得なくなりました。それで愛の再検討をはじめたのです。

# 教会成長を妨げている要素

日本の教会成長を妨げている原因は種々考えられる。ここにこれらを教会内と教会外の二つの要素に分けて考察することとした。



## ① 何故縛れるのか

創世記の十一章にバベルの塔が倒壊した話があります。それは建築技術の問題でなく、主の怒りが原因でした。人間が力を結集して天に至ろうとする試みを、創造主は、主への反抗と見て、さばいたと記されています。「彼らがみな、一つの民、一つのことで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らが生じようと思うことで、とどめられることはない。さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いのことばが通じないようにしよう。」(創世十一の五―八)

この事件以来、人類は何度か一つになろうと試みましたが、その結果はいつも分裂でした。創造主を無視し、主を抜きにして団結しようとする人類の意図を、主はご自分への叛逆と見られ、言葉を乱すことによって、一つになれないようにされた。人間の縛れは、主への反抗に対する主のさばきとして、主から来しました。言葉が通じないで起るのです。クリスチャン同志でもこの言葉の問題に気づかないとトラブルはいつでも起ります。

## ② 縛れは親しくなっから起る

対人関係の縛れを観察していると、対人関係の縛れは互いの関係がある程度進んでから起ることに気づきます。対人関係が進むと、お互いに相手に期待しはじめます。そして、相手が自分

の思うように動くことを期待するようになる。この時から縛れはチャンスを探いはじめます。教会に来て、愛を説かれると、相手に対する期待が先に育ち、他人の愛に対して敏感になり、期待が増すと……わずかなことを裏切られたと感じ、縛れてしまふ。愛を説けば説く程、納まるべきものが縛れてしまふ。主が教えられた愛、実行された愛は、そんなものではない筈です。しかし教会の現実是对人関係の縛れで教会を去る人が後をたたない。

## ③ 愛の再検討

そこで聖書に教えられている愛を再検討することにした。聖書の中には、フィリアとアガペーの二つの愛が出て来ます。これらは、どんな愛なのだろう。この二つが同時に出来る箇所は、ヨハネの福音書二十一章です。復活された主が、三度ペテロに向かって、「私を愛するか」と問う場面です。ここで主ははじめの二回アガペーを用い、三回目はフィリアを用いておられます。しかしペテロは、三回ともフィリアを用いて、「私があなたを愛することは、あなたが存じます」と答えています。このペテロの答に対して主は「私の羊を飼いなさい」と言われ、ペテロの答を受入れておられます。両者は全く同じなのだろうか……

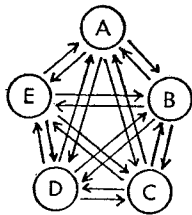
ではあの「デマスはこの世を愛して……」という箇所はどちらの愛を用いているのだろうか。「デマスは今の世を愛し、私を捨て……」(Ⅱテモテ四の一〇)

決してよい意味ではない。それなのにこの部分の愛にアガペー  
サス(愛してしまつて)が用いられています。するとどうなる  
のだろう? アガペーを普通神の愛と言ひ、フィリアを兄弟愛  
と言ひ。とするとデマスのところで何故、アガペーが用いら  
れているのだろう。……

そうだとするとアガペーの本質は愛の大きさの問題でなくも  
つと別のところにあるのではないか、と気づかされました。そ  
れはアガペーやフィリアを考える時、大切なのは大きさでな  
く、その方向なのではないかということです。つまり、一般に  
兄弟愛と言われるフィリアは、自分と相手との間を往復して成  
立する愛。往復運動の愛と考え、アガペーすなわち神の愛と言  
われているこの愛を一方行通の愛と考えました。

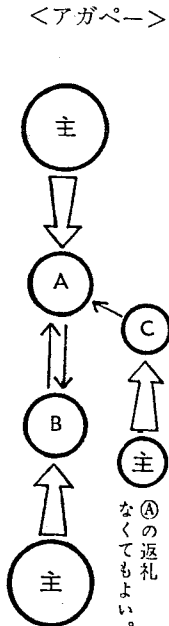
このようにしてまとめて見ると両者の愛の違いがよく分るの  
ではないでしょうか。量の差ではなく、方向の差として考える  
とよく理解出来て来ます。デマスはこの世を愛したという場  
合、デマスは今の世に突っこんで行つてしまったということに  
なるでしょう。またペテロが三回も主に対してフィリアを用い  
たのは、主からの愛の返礼を期待した愛だと考えられます。

＜フィリア＞  
相手と自分との間の往復運動。  
相互に平均に往復する愛。  
相互の均衡が破れると相互の関係が破れる。  
常に返礼が必要な愛。

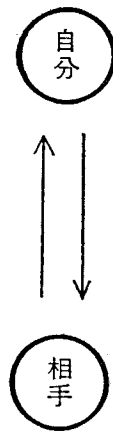


スムーズに往復しないと相互  
の関係が破れる。五人でも大  
変です。

聖書が互いに愛し合へと教えるとき、それはアガペーの愛が用  
いられています。



私達が人を愛するのは、人が私を愛してくれたことへの返礼  
ではなく、主が注いで下さった愛で自分を満たし、それを他の  
人に向かつて注ぐ。主の愛の満たしが原動力で行動する愛。自  
分から出て行つて、人からの返礼を求めない愛。このことが十  
分理解出来、体得出来たならば、人の反応は問題でなくなりま  
す。ここで重要なのは、主の愛で自分を満たす、そして、それ  
を他の人に向かつて出す、ということ。主の愛の満たしな  
しには、クリスチャン同志であっても纏れます。クリスチャン  
にとって重要なのは主の愛であつて人からの愛ではない。ここ  
の愛の交通整理が出来ていなかつたために、教会内の対人関係

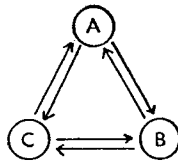


＜アガペー＞  
自分から出て行く一方行通の愛。  
神から来て、人に向かつて出て行く愛。  
人から返つて来ることを期待しない愛。  
主によって満たされ、下に向かつて出て行く愛。



教会の中で対人関係の纏れを観察してみても共通して言える  
ことは、相手が期待通りに反応しなかつた時に纏れはじめる  
ということ。ですから私達はフィリアの愛を互いに強要し合  
つて来たように思われます。つまり人の反応が自分の行動の作  
動因になっているのです。いつでも、人間が原因で纏れていま  
す。したがってフィリアの愛で、纏れないように均衡を保ちな  
がら交わることは、人数が増加したら困難になります。

＜フィリア＞



三人位なら  
何とか……

が纏れたのだと思います。

アガペーとフィリアの混同、ここに問題の根があるように思  
われます。

「聖霊によつて始めたのに……今になって肉で仕上げるとい  
うのか」(ガラテヤ三の三)とはまさにこの愛の混同によつて  
生じている問題を指摘しているように思います。

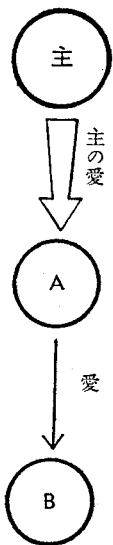
人からの愛を期待して行動するのではなく、主の愛に心満たさ  
れて、それを他の人に惜しみなく分け与える人になりたいもの  
です。

(二) アガペーを身につける

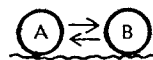
第一コリント十三章に愛について詳しく教えられています。  
この中から幾つかのことを学んで、愛の一方行通を身につけた  
いと思ひます。

①愛がないなら  
主からの愛が私達を支えているのでなければ私達の全存在は  
何のねうちもありません。

＜主に根ざす＞



<浮き草人生>



支えなし

②愛は寛容である  
寛容と訳されている語には幾つかの意味があります。その中で最も理解し易い意味を覚えておくとよいと思います。「ゆっくり結論を出す」。つまり対人関係で相手の評価はゆっくり結論を出す。急いで出さない。これが寛容です。主は七度を七〇倍するまで許せと言われました。これは寛容の手本です。一例をあげてみます。

私が或人を教会へ誘ったとします。その人はとてもよい返事で礼拝出席を快諾してくれました。さて日曜日になって……来ないので。「お客があつて」とか。「では来週どうぞ」「はい、今度こそ」。また来ません。こんなことが三回も続くと私は、「あの人は信用出来ない」と結論してしまいます。しかし主が言われることを適用しますとこうなります。七×七〇すなわち四九〇回……毎週誘って裏切られて……一年で五二回。四九〇回は何と九年半も誘い続け裏切られ続けて、然る後に……「この人はウソツキかも知れない」と結論を出す。この位ゆっくり結論を出すのが寛容です。私は早すぎます。寛容であるために

うとします。愛はそうしないのだと教えられます。主の愛は人の悪を許す。

⑤愛は不正を喜ばずに真理を喜びます

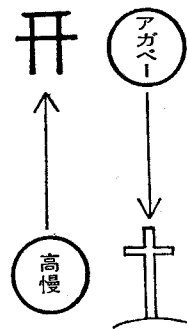
真理を喜ぶ。聖書には三つの喜びが出て来ます。普通の喜び。飛び上がって喜ぶ喜び。またもう一つは共に喜ぶ喜びです。ここでは三番目の共に喜ぶ、が用いられています。愛は真理を喜ぶという時、共に喜ぶのだということです。面白いのはギリシヤ語の語呂がスグカイレとなっていることです。よい話を聞いたのですぐ帰って共に喜びなさい、ということ。愛は真理を聞いたら他の人と共にそれを喜ぶものだと思えます。

⑥愛はすべてをがまんします

すべてをがまんする。ローマ人への手紙五章に患難、忍耐、錬達、希望、と教えられています。これは主が私達を祝福される道順でもあります。患難に耐えることなしに希望には至らない。錬達と訳されている語の第一義は「証明」ということです。すなわち主は私達を役立つ者になるよう試練を与えます。それによく耐えた「証明」が錬達となって身につきます。ですから患難をさけては錬達も希望も生まれません。

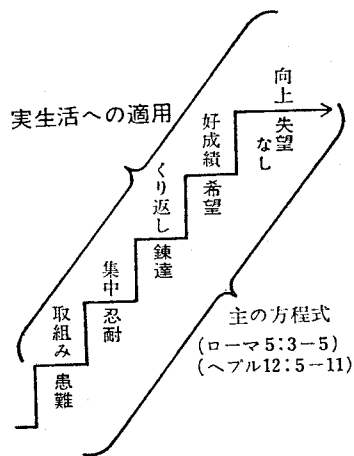
は自分を主の愛で満たさなければなりません。  
③愛は自慢しません

主は高ぶるものをしりぞけ、へり下る者に恵みを下さいます。最も強烈な例はあのヘロデ王の死の事件です。ヘロデは悪王として知られ、数々の悪事を働きました。しかし主は、彼が悪事を働いている時は生かしておいたのです。しかしソロ、シドンの人々が来て、「神の声のようだ」というのを黙って聞いていた時、その思い上がったヘロデを虫にかませて殺してしまいました。



こうしてみると、死者を神仏として拝む我国は最も高慢な民族です。私は主の愛にならって謙遜を身につけたいものです。  
④愛は人のした悪を思いません

口語訳では恨みをいだかないとなっています。恨む……この言葉のそもそもの意味は、「数える」です。つまり、人の悪事を数えて心にとめておくのです。この「恨み」という語が「数える」という意味を持つことが分ると、なる程とうなずけます。私はしばしば人の悪を心に数えて折あらば攻撃の材料にしよ



<主の愛が支え>

⑦愛は決して絶えることはありません

私達はこの地上を去って、やがて主の前に立ちます。その日には預言も、知識も必要なくなります。今まで教えられたことが現実となるからです。でもその時私達に最も必要なことは神の愛によって主の前に立てるといことです。この主の愛こそが一切の支えです。この主の愛で自分を十分満たし、他の人々にもこの愛を分けることのできる愛の器としていただきたい。

(日本基督長老四日市教会牧師)